

高松市生涯学習センター 生涯学習推進事業【コミュニティセンターとの連携事業】  
「讃岐のため池文化と水」を開催しました。

平成30年12月7日（金）、農学博士で元香川用土地改良区相談役の長町博さんを講師に迎え、「讃岐のため池文化と水」と題する講義を開催いたしました。講義内容は以下のとおりです。

全国有数のため池県として知られる香川県には、狭い県土に14,600余りのため池がひしめくように分布している。そのため池を中心とした生産活動や日々の暮らしが、香川県地方に「ため池文化」とも呼ぶべき独特の「水の文化」をもたらしている。

記憶に新しい平成6年の夏期渇水は、香川県では20世紀で最も厳しい大渇水であった。このため農業用水はもとより上水道用水は危機的状況に陥り、厳しい給水制限が長期にわたった。しかし、香川用水はその機能を最大限に発揮して、利水者間での融通を配慮した配水調整を行って、上水道の危機を救済し、空前の大渇水を克服した。しかし、その背景には、ため池を中心として、網の目のように張り巡らされた昔ながらの水利システムが、有効に働いていたことを忘れてはならない。すなわち近代的な水利システムである香川用水と、昔ながらのため池を中心とした壮大な水利システムが、相互に有効に機能し合って、劇的な効果を発揮したのである。

ため池はそれ自体貴重な水資源であり壮大な水利遺産である。と同時にその中に仕込まれている、貯められた水をどのように利用するかという、目に見えない水利用の仕組みもまた立派な水利遺産である。その仕組みの中心をなしているのが「番水」である。即ち、番組に基づいて秩序正しく田に配水する伝統の灌漑技法である。この番水は渇水時の節水灌漑に大変な威力を発揮する。

このほか、ため池には年間を通じて行われる維持管理にかかわるいろいろな行事があり、農村での日々の暮らしに深く溶け込んでいて、そこから農村風物詩や水の歳時記が醸し出されてくる。また、ため池には水利を軸とした人と人との交わり、繋がりがあり、農村でのコミュニティとして重要な働きをしており、昔ながらの「むら機能」「集落機能」を維持継承する働きをしている。これらは香川県地方独特の「ため池文化」とも呼ぶべきものである。一方、香川用水は早明浦ダムの大渇水に伴う取水制限が頻発しているために、いまなお水不足を心配している県民は多い。しかし、香川用水通水開始からこれまでの44年間を振り返ってみると、この44年間のうちで水道が断水して市民が難渋したのは平成6年の1回だけで、あとの43年間は平穏に推移している。したがって、香川県はもはや渇水常習県ではない。今後、計画基準年を超える渇水に見舞われたときは、ダム建設といったハード面の対応でなく、平6渇水体験を活かして、ソフト面の「節水と融通」で切り抜けるのが賢明である。そのためにはその大本となる「ため池文化」を大切に守り、次の世代へ継承していかなければならない。